学位請求論文（論文博士）審査報告書

氏名・（本籍地）	伊藤　宏之（千葉県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	乙第 95 号
学位授与の日付	令和 4 年 3 月 15 日
学 位 論 文 題 目	板碑と中世東国社会
論 文 審 査 委 員	主査　佐々木　倫朗
	副査　塚田　良道
	副査　湯浅　治久
	副査　三浦　龍昭

論文の内容の要旨（１２００字以上）

本論文は、「板碑と中世東国社会」と題し、序章と終章、七章からなる論考である。目次は、以下の通りである。

序章
第 1 章　「板碑」の成立
第 2 章　板碑と造立者
　第 1 節　東国武士を供養した板碑
　第 2 節　家族を供養した板碑
　第 3 節　「位牌」と呼ばれた板碑
第 3 章　板碑にあらわれた信仰
　第 1 節　板碑にみる善光寺信仰
　第 2 節　板碑にあらわれた民間信仰
第 4 章　板碑の製作
第 5 章　板碑の生産と流通
　第 1 節　武蔵型板碑の生産と流通
　第 2 節　葛西城址出土板碑群にみる板碑製作
第 6 章　板碑の諸相
　第 1 節　東京低地東部における題目板碑の様相と製作
　第 2 節　「基部銘」を有する板碑
　第 3 節　墨書銘板碑について
第 7 章　板碑の伝世資料研究
　第 1 節　所在地を離れた板碑
　第 2 節　逸亡資料の復元と収集資料の活用
　第 3 節　浅草寺に関する資料の伝来
終章

本論文の大略は、次の通りである。

中世の東国において数多く造立されていた石塔の一種である「板碑」について、本論では、文献史学からの検討と考古学的検討とを併用し、多角的な考察を試みている。

上記の目次に示すように、本論は全 7 章から構成されている。第 1 章から第 3 章では、板碑の銘文や本尊の検討から板碑の性格、機能を考える。第 4 章から第 6 章では、考古学的な見地から、板碑の生産と流通について考察する。さらに第 7 章では、板碑の伝来を明らかにすることで、所在地を離れた板碑を地域史資料として活用する手法について論じている。

まず序章では、研究史を総括し、研究成果の到達点や問題点などを的確に整理し、本論展開への序としている。

第 1 章では、最古の板碑とされる、嘉禄 3 年（1227）銘板碑が出現する前夜の様相について考察している。従来の板碑の源流に対する考え方を再整理するとともに、定型化した板碑が出現する嘉禄 3 年以前の石造物のあり方について、有銘資料を中心に検討を加えている。そして、定型化した板碑の出現前夜の様相を明らかにしている。

第 2 章では、銘文にあらわれた人名や造立趣旨などを手掛かりに、板碑と造立者との関わりを取り上げ、板碑を介した供養の在り方を明らかにしている。

第 1 節では、関東各地に散在する東国武士の名を刻む資料を縦覧し、人名表現を中心にその在り方と変遷を検討し、人名の表記には大きく俗名と法名があり、その表記の変化は、故人供養のあり方と密接に関係すると指摘している。

第 2 節では、法名で表記された造立者について考える試みとして、「西仏板碑」（台東区・浅草寺）を素材に検討を加え、造立当時の社会的、地理的状況を確認しながら、西仏という人物の特定を行い、西仏板碑の特殊性についても言及している。

第 3 節では、「位牌」銘を有する阿波型板碑を手掛かりに、板碑の機能が多様化していく様子を明らかにした。板碑は 15 世紀から墓標化が顕著となるものの、その始源はさらに遡ると考えられる。「位牌」銘板碑は、こうした機能の転換期に出現した可能性があることを指摘し、位牌との関係を、中世禅宗による「清規」の影響を視野に入れつつ明らかにしている。

第 3 章では、板碑から在地における信仰の展開を考えている。

第 1 節では善光寺信仰を取り上げる。新たに発見された建長 4 年（1252）銘資料を通じて、13 世紀後半の関東地方における善光寺如来像を刻む板碑について概観し、地理的分布からみた特徴や造立者の信仰的背景などを探っている。続いて、「善光寺時供養」と刻まれた 2 基の 16 世紀の結衆板碑に注目して、村落での信仰のあり方を解明している。

第 2 節では、民間信仰板碑の銘文から、信仰主体の変化、村落における民間信仰行事の成立について論じている。「民間信仰板碑」は、15 世紀中葉になって成立し隆盛するが、その源流は、在地における経典供養や念仏供養などの信仰行事にあると考えられる。当初は、僧侶が中心であった信仰行事が、やがて民間に受容される過程について板碑銘文の分析から究明している。

第 4 章では、板碑の製作工程を明らかにしている。とくに、これまで取り上げられてこなかった、東京低地部を中心に検討を行っている。また、茨城県南西部から千葉県北西部の資料にも目を配りつつ、当該地域における板碑の製作工程を検討し、その工程の復元モデルを提示している。

第 5 章では、板碑の生産と流通について、浅草寺遺跡や葛西城址（葛飾区）の出土資料をもとに分析を加えている。

第 1 節では、隅田川下流域における浅草寺型蓮座板碑の存在を明らかにし、東京低地部における板碑の生産と流通の実態を示し、同時に、この同形板碑が出現した背景について論じている。

第 2 節では、葛西城址から出土した板碑群について検討している。板碑の本尊と蓮座に注目して分類することで、同板碑群の特長を明らかにし、東京低地部における板碑の製作と需給関係の動向についても明らかにした。

第 6 章では、題目板碑、基部銘、墨書銘といった特徴的な資料の分析を通じて、板碑の製作及び生産と流通に関する実態を、具体的に跡付けている。

第 1 節では、葛西城址出土の題目板碑群に注目する。その中には、特徴的な本尊配列をしたものが多数確認でき、それらの分布と教団の拡張との間には密接な関係を想定できることを指摘している。さらにこの特有の題目板碑を分析し、その背景として、江戸川・中川下流域での日蓮教団による教化活動の可能性を指摘し、局地的に分布している状況から、当該地域で製作され流通した可能性について言及している。

第 2 節では、辻字宮地 1 遺跡（川口市）から出土した「基部銘」板碑について、他の事例を交えて分析する。それにより基部銘の彫刻が、板碑製作の過程で行われたことが明らかになった。

第 3 節では、近年発見した寛正 5 年（1464）銘阿弥陀一尊種子板碑（横浜市）をもとに、墨書銘のあり方から、板碑製作者（工人）の作業分担、役割について見方を論じた。

第 7 章では、板碑を歴史資料として活用する取り組みのひとつとして、伝世資料や博物館・大学などが保有する資料の活用に向けた検討を行っている。

第 1 節では、かつて足立区内に所在した板碑が、早稲田大学會津八一記念博物館に収蔵されていることを突き止め、来歴不明となっていた所蔵資料が、過去の調査資料と突合することで、その出所、来歴が跡付けられることを指摘している。

第 2 節では、千代田区における悉皆調査の成果を基に、失われた資料群の復元を試みている。千代田内の板碑の悉皆調査だけでなく、区内旧在の資料についても存否の確認を行い、失われた資料も近世・近代の文献を探索する中から抽出することで、その全容の復元が可能なことを指摘

している。さらに、大学や博物館などが所蔵する、来歴不明の資料の扱い方について検討を行った。原位置を失って資料的価値が減じたと等閑視されている収集資料を「資料化」し、その伝来を明らかにすることで一次資料化が可能であり、こうした活用の有効性を示している。

第 3 節では、浅草寺での調査成果を取り上げる。浅草寺の歴史は、ごく限られた文献史料をもとに叙述されてきたが、考古資料に注目し、浅草寺遺跡から出土した板碑などの考古遺物を、調査ごとの時系列に沿って整理し、歴史資料として活用する道筋を示した。

以上、本論では、板碑の定義と源流について見解を示し、銘文の検討から中世東国の在地社会における人々の供養の変化と信仰の変容を跡付けている。また、考古学的な分析と検討によって、板碑の生産と流通の実態を解明し、中世東国における流通史の一端を明らかにしている。さらに、所在地を離れた未検討資料の「資料化」と活用に向けた方法論の確立に見通しを付け、東国中世史の解明のために、こうした基礎的作業の必要性と研究の有効性を提示している。

審査結果の要旨（１２００字以上）

伊藤宏之氏の論文は、論文中に掲出された多くの拓本に示されるように、中世東国において数多く造立された板碑について、視野を東国に限定することなく、長きにわたって自らが調査した成果を総括したものであり、労作といえる。研究史上でみれば、本論文は、中世東国の板碑を資料として本格的な研究の対象として扱い始めた 1990 年代以降の文献史学や考古学等の様々な成果を踏まえ、改めて捉え直そうとする試みということができる。

以下、審査の結果を記すことにする。各章の概要と結論については、上記に詳述したので、審査結果は、特に注目される章節を取り上げて言及することにする。なお、公開審査でなされた指摘も含めた審査結果となっている。

まず第 1 章における最古の板碑と評価される嘉禄 3 年（1227）銘板碑が出現する前段階の状況について考察を加えている。近年の 12 世紀以前の木製塔婆の確認の中で、とくに野々江本江寺遺跡（石川県珠洲市）から出土した「木製板碑」は本尊や銘文が残存しないものの、形態が「板碑形」を呈していることから、石造板碑の源流と捉える研究が多い状況にある。これに対して、伊藤氏は「木製板碑」が出土した地域において後に造立された板碑は、必ずしも典型的な板碑が主流とはなっておらず「自然石型板碑」が多いことを指摘し、必ずしも「木製板碑」の形態が石造板碑に継承されていないことを主張している。この伊藤氏の主張は、形態のみから考えた議論に捉われることなく板碑の地域性を考慮した議論であり首肯しうるものである。その主張は、板碑の成立の議論に一石を投ずるものと思われる。

第 2 章では、板碑の銘文に記される人名や造立趣旨から、供養の在り方を考察している。まず第 1 節では、14 世紀を中心とする関東各地の東国武士の人名を記す板碑の検討を行っている。その中で、供養される存在が武士であることが予想できるのは、被供養者が俗名で記されているためであり、俗名による供養の存在を想定し、江戸時代の供養のあり方と異なることを指摘している。

また、古代から戦国期にかけて石造物の供養銘が、父母といった続柄を示す文言から、次第に個人の俗名、法号、さらに清規によって規定される法名（戒名）へと変化していくことを指摘し、禅宗の伝来とともに中国から移入された清規が広く普及し、葬送儀礼の規範が形成されていく過程と供養銘の変化が重なることを想定している。この指摘は、説得力をもつものであり、板碑を短い時代幅のみの視点で考察するのではなく、長期的な視野を持って総合的な考察を行わんとする伊藤氏の視点の長所を窺うことができる。

第 3 節では、「位牌」銘を有する阿波型板碑に着目し、板碑が墓標的機能を持っていく様相を明らかにしている。板碑のなかには、本尊の下方部に蓮座に乗る個人名や造立者(供養者)との続柄を表現して墓標的機能を持っていたと考えられる「精霊奉安型板碑」と呼ばれる型の板碑が存在し、13 世紀後半から 14 世紀中頃に多く確認されている。これに対して、近世の墓標の戒名表記を「位牌書式」「位牌様式」と呼ぶが、その「位牌書式」に基づく銘文を持つ板碑も存在している。「位牌書式」は、前述の清規に基づくものであり、伊藤氏は、この墓標的機能を持つ板碑を「清規型戒名(法名)板碑」としている。「清規型戒名(法名)板碑」は、多く 14 世紀後半から 16 世紀にかけて造立されている。このため、14 世紀中期頃から墓標的機能を持つ板碑は、「精霊奉安型板碑」から「清規型戒名(法名)板碑」に変化すると指摘している。その上で、伊藤氏は、この変化は続柄や個人名による供養から清規型戒名・法名による供養に、供養自体が変化したことを想定している。このことは、14 世紀中期に清規に基づく戒名や法名が普及し、当時の社会における供養自体も変化するこ

とを指摘するものであり、信仰や宗教の伝播や変化を考える上で極めて重要なものである。欲を言えば、この指摘と、清規の日本全体や東国への伝播がどのような時期にどのようになされたのかという説明が同時になされれば、さらに説得的な議論となったと思われる。しかし中世の供養のあり方自体の変化を示唆する重要な指摘をなしたと評価できる。

第3章では、様々な機能を持った板碑を検討している。まず第1節において「善光寺時供養」と刻まれる板碑に注目して分析を行っている。そのなかで、善光寺時供養とは、阿弥陀如来の縁日に女性が集まって念仏を唱えて物故者の追福と自身の安寧、往生を祈念する近世以降の念仏講の前身であったと想定した。そして、善光寺供養と刻まれる板碑は、女性たちが中心となって組織された結衆によって造立された板碑であることを明らかにしている。伊藤氏の善光寺時供養に関する見解は、南北朝期から戦国期にかけて史料の乏しく空白の時代と言って良い時期の善光寺信仰の一端を明らかにするものとして高く評価できる。

続いて第2節では、念仏供養、月待供養、庚申待供養といった既成の仏教教団の教理・信仰から説明できない要素を持つ様々な民間信仰を共にする信仰集団（結衆）によって造立された板碑について検討している。そのなかで特に現在確認できる板碑の数から民間信仰の流行の推移を明らかにしているが、民間信仰に関する文献資料が断片的な形でしか確認できない状況の中で、考古資料でもある板碑の特性を活かした分析となっている。中世の民間信仰に関しては、全国的に見ても史料が乏しい状況にある。その意味で、東国の民間信仰とその担い手を探る貴重な手がかりを示したと評価できる。

また第1節と合わせて、信仰を共にする信仰集団（結衆）によって造立される板碑を扱い、板碑が、供養塔・墓標に限定されない多様な機能を持つことを示している。

第4章から第6章では、東京低地部における板碑を扱いながら、考古学的な視点から、板碑の製作と流通について考察している。第5章においては、浅草寺遺跡や葛西城址(葛飾区)の出土資料をもとに板碑の生産と流通について論じている。第1節では、浅草寺型蓮座板碑の存在を明らかにし、半円形蓮座板碑・蝶形蓮座板碑などの多摩川下流域で生産された板碑群と別系統の板碑群が存在したこと、隅田川下流域において、原石産地で採石、外形整形された板碑の未成品がもちこまれ、紀年銘・法名などの銘文を刻む碑面彫刻が行われ流通していたことなどを明らかにした。これは、隅田川流域という従来注目されてこなかった地域において、板碑の碑面彫刻を行う工人ないし工人集団が存在したこと、その工人が製作した板碑が流通していたことを示す重要な指摘であった。

また、第2節において、葛西城址から出土した板碑群について検討し、同板碑群が葛西城址近辺で製作され、15世紀中期から16世紀中期の段階において他地域に搬出されたことを確認した。そして、葛西には「宿」が存在したことから、これらの板碑群の存在と浅草寺遺跡との間の関係を想定し、板碑が既に言及されている水上交通のみではなく、陸上交通を通じて流通していた可能性を新たに指摘している。この第2節の指摘は、第1節・第3節での成果と合わせて、東京低地部において板碑の製作、加工が行われて流通されていたこと、それを担う工人ないし工人集団の存在を明確にするものであり、東京低地部に「小地域」ともいうべき、文化圏・信仰圏・経済圏が存在していたことを明らかにするものであった。この「小地域」の存在は、多摩川流域やその他の地域で指摘されている「小地域」と同様のものと考えられ、様々な「小地域」が相互に関わり合うことによって成り立っていたと考えられる東国社会のあり方に対して、大きな示唆を与えるものと評価できる。

そのため、公開審査に関する議論も、この部分に関して複数の質疑が集中することになった。それらの議論は、他地域の例と比較した上での東京低地における板碑の製作と流通のモデルの提示を求めるもの、「小地域」の複合によってどのような独自の文化圏・信仰圏・経済圏を想定可能なのか、従来指摘される「利根川文化圏」との関わりを問うなど、いずれも今後の板碑研究、東国史研究の発展に向けて、伊藤氏の積極的な研究、発言を望むものであった。また、工人集団の評価に関しては、宗教から独立した存在ではなく、宗教者との関わりを踏まえたものと考えるべきであるとする厳しい指摘もあった。

第7章では、原位置を失って歴史資料として活用されることの少なかった伝世資料や博物館・大学などが保有する板碑の資料としての活用に向けた試みを行った。第1節では早稲田大学會津八一記念博物館に収蔵されている旧足立区所在の板碑について、過去の調査資料と照合によって、その出所や来歴を明確化し、原位置を跡付けられることを指摘している。第2節では、千代田区内に現在所在する板碑、過去に所在したことが確認できる板碑を、悉皆調査と近世・近代の文献の博捜によって行って集成している。

第3節も含め、調査資料や近世・近代の文献の博捜、悉皆調査という極めて労力を必要とする作業を行う中で、板碑の原位置の確認が可能となることを示したことは、大きな成果と言うことがで

きる。そして、伊藤氏の提示したこの手法を通じて、今後の板碑研究が従来未活用であった板碑の活用を通じて、さらに発展できる途を提示したということができる。

本論文における成果は以上のようであるが、いくつかの問題点が存在していることも事実である。代表的なものとしては、本論文は、伊藤氏の長年の調査と分析を集成したものであるが、その調査と分析を踏まえた考察、あるいは視角の提示が若干弱い傾向が認められることである。端的に言えば、公開審査で議論が集中した第5章の分析の中で、伊藤氏が指摘した「小地域」のモデル像を提示して欲しいという問いや、どのような文化圏・信仰圏・経済圏であったのかという問い、また東国社会全体における位置付けに関する問いなどは、論文内で提示された議論をさらに踏み込んで発展させるべき課題があることを意味している。その点において、論文としては不十分な面があることは否めない。しかし、この問題に関して、質疑において口頭ではあるが、上記の問いかけに対する研究の現状と展望を踏まえた補足説明を得ることができ、今後の研究の中で、伊藤氏自身の視角を発展させた議論の展開を行っていく確信を得ることができた。

また、審査においては、13世紀前半の武蔵北部において、緑泥片岩という外観上で顕著な特徴を持つ石材を用いて板碑が何故出現するのか、製作されるようになるのかという問題が議論された。この問題に関しては、審査において伊藤氏の十分な解答を得ることはできなかったが、供養者である武士の信仰や宗教儀礼に深く関わる問題であると考えられる。解明が非常に困難な問題であると思われるが、板碑が成立する歴史的背景を問う上で重要な問題といえ、板碑を題材に信仰や宗教儀礼について研究する伊藤氏であるからこそ解明できる問題であり、継続した追求を期待している。

このように若干の不備が見受けられるものの、「審査結果」の冒頭で述べたように、本論文は、1990 年代以降の文献史学や考古学等の様々な成果を受けて板碑を再度捉え直そうとした試みであり、従来の供養塔に加えて墓標や民間信仰塔を板碑の定義の中に加えて示し、時代の変化の中で板碑が多様化していったことを明示したことは、今後の板碑研究の中で大きく評価されるものと思われる。また、伊藤氏の提示した東京低地部における板碑の生産と流通の問題、未活用資料の「資料化」の問題も、今後の研究の礎として重要な意味をもつ成果である。

以上に述べたことを踏まえて、本論文は、審査委員4名の全員一致で、論文博士の学位に相当する十分な資格を有すると判断した。

公表予定

日　程	令和　　年　　月　　日
公表形態	①掲載誌名：【　　】【　　】号・巻　【　　】頁　【全文・要約】
	②単著（発行者）
題　目	<※タイトルを変更した場合>